


この9章では、教会の迫害者であったサウロ（後のパウロ）の救いの出来事に始まり、彼がダマスコとエルサレムで福音を語ったこと、そして、ユダヤ人たちから命を狙われ、彼の出身地であるタルソへと逃れたということが記されていました。今日は、その続きですが、話はサウロからペテロへと変わります。ペテロは、迫害によって諸地方に散らされた弟子たちを巡回していましたが、その際にルダとヨッパという二つの町で起こった出来事がここには記されています。

 前の地図を見て下さい。ルダとは、エルサレムからヨッパへ通じる道の途中にある町で、旧約時代のロデ、現在はロッドと言われています。エルサレムから北西約 35 キロに位置する小さな町で、そこからさらに北西 15-17 キロほど行くと地中海に臨む港としてヨッパの町がありました。ちなみに、このヨッパは、旧約のヨナが、タルシシュに向けて出港した港町です。

ペテロはこの二つの町にいる聖徒たち、つまり、教会を訪問したわけですが、まずルダでは、中風で8年間も床に着いていたアイネヤという人に出会います。そこで何が起こりましたか？34 節「ペテロは彼にこう言った。『アイネヤ。イエス・キリストがあなたをいやしてくださるのです。立ち上がりなさい。そして自分で床を整えなさい。』すると彼はただちに立ち上がった」。

いつものことですが、ここにはその詳細は記されていません。ですから、そのままを受け止めるしかないのですが、このアイネヤへのいやしは、続く 35 節の結果を生み出します。「ルダとサロンに住む人々はみな、アイネヤを見て、主に立ち返った」。アイネヤへのいやしは、彼自身だけでなく、その周囲にいた人々にも主の御力を知らせることになります。そして、これを機に、人々はみな主に立ち返るのです。

この後、ペテロはヨッパに向かいます。それは、その町にタビタ（ギリシャ語でドルカス）という女の弟子がいて、彼女が病気になるまで死んだため、その弟子たちが、ペテロに来てくれるようにと使いを送って願ったからです。タビタという人は、多くの良いわざと施しとで知られていた人でした。やもめたちに下着や上着を作ってあげりしていたところからして、彼女は教会のやもめたちの世話人のような形で仕えていたと思われる。当然、そのような人は、人々からも愛されるわけで、特にやもめたちから彼女は慕われていたようです。

ペテロがヨッパに着きました。すると人々は、タビタの遺体が置かれてある屋上の間にペテロを案内しました。40-41 節「ペテロはみなのを外に出し、ひざまずいて祈った。そしてその遺体のほうを向いて、『タビタ。起きなさい』と言った。すると彼女は目をあけ、ペテロを見て起き上がった。41 そこで、ペテロは手を貸して彼女を立たせた。そして聖徒たちとやもめたちとを呼んで、生きている彼女を見せた」。

とてもシンプルに書かれていますが、ここで起こっていることは、とんでもないことです。死んだ人がよみがえったのですから、それは彼らは驚いたことでしょう。そして、そのニュースは、たちまち周辺へと広がりました。その結果が 42 節です。「このことがヨッパ中に知れ渡り、多くの人々が主を信じた」。ここでもペテロを通して行われた主のわざは、タビタとまわりにいた弟子たちに主の御力を知らせることになります。そして、そのことを聞いたヨッパの人々の多くが、主イエスを信じるようになったのです。

43 節「そして、ペテロはしばらくの間、ヨッパで、皮なめしのシモンという人の家に泊まっていた」。今日の箇所はここで終わりですが、私たちはこのところからどんなことを学ぶことができるのでしょうか？アイネヤのように、脳血管障害の後遺症である半身不随、片麻痺、言語障害、手足のしびれやまひなどといった中風になること、またタビタのように病が原因で死に至るといったことは、私たちにとって決して関係のないことではないと思います。むしろ、私たちのまわりにも中風の方や病で死を迎えた人がいることでしょう。

ここでの出来事をそのまま理解するならば、主は、「いやし」と「よみがえり」を通して、ご自身の御力をご自分を信じる者たちに現されたということが出来ます。つまり、そこには病に苦しみ、死に悲しむ者たちをあわれまれる、あわれみ深い主を見ることが出来ます。また同時に、多くの人々が主に立ち返ったわけですから、その主のわざを通して主の救いのご計画がまた一歩前進したと言えるでしょう。そして、そのことをして

おられたのが、実に主ご自身であることを私たちはここから学ぶことができます。主はペテロを用いて、ご自身の救いのご計画を完成へと近づけられたのです。

では、どうでしょう？救いのわざを行われるのが主ご自身であるなら、そこには私たち人間側の成すべきことは何も残されていないのでしょうか？つまり、そこに主を信じる信仰があってもなくても、主はご自分だけで救いのわざを行い、そのご計画を成就へと至らされるのでしょうか？決してそんなことはありません。まず主は、聖霊を受け、聖霊に満たされていたペテロを恵みの通り流す管として用いられました。

では、そこにはペテロの信仰しか見ることができませんか？アイネヤはどうでしょう？おそらく彼のうちには、いやしを期待する心はあまりなかったと思います。というのも、彼はすでに8年間も中風で床に着いていたのです。すでにあきらめていてもおかしくありません。でも、ペテロと出会った時、そして、ペテロから「イエス・キリストがあなたをいやしてくださるのです。立ち上がりなさい。そして自分で床を整えなさい」と言われた時、彼はそれを信じて立ち上がったのです。

これまでも似たようなケースの時には触れてきましたが、もしあなたがアイネヤだとしたら、「イエス・キリストがあなたをいやしてくださるのです」と言われて、立ち上がると思いますか？立たせて下さるのは神であられる主イエスです。でも、その立たせて下さる方を信じて、立ち上がるのはあなたです。そこで主を疑うならどうですか？「そうは言われても、私にはできません」と言って、立ち上がろうとしないならどうですか？それでも主はあなたの意に反して、無理矢理、あなたを立ち上がらされるのでしょうか？

アイネヤがどの時点（瞬間に）でいやされたかはわかりません。でも、彼は「イエス・キリストがあなたをいやして下さる」というペテロのことばを聞いた時、「その通りです。同意します。アーメン」と言ったかどうかはわかりませんが、主を信じて立ち上がったのです。言い方を変えるなら、主にはそれができると信じたということです。主はそのような信仰をもつ者に、ご自身の御力を現されます。

では、タビタの場合はどうでしょう？ペテロがヨッパに着いた時、彼女はすでに死んでいました。ですから、そこに彼女自身の信仰を見ることはできません。でも、そこには彼女を慕う聖徒たち、またやめもたちがいました。主は、彼らの信仰を通して、タビタをよみがえらされたのではないのでしょうか？というのも、彼らはペテロがルダにいると聞いた時、ふたりの人を送って、「すぐに来てください」と願ったわけですが、なぜすぐである必要があったのか？それは葬儀のためですか？

ここには直接的な表現はありません。でも、ペテロならタビタをよみがえらすことができるかもしれないと彼らは考えたのです。そのような願いは、神様を信じていない人や奇蹟を信じない人には愚かに思えるかもしれません。でも、主を信じた彼らは、その後、ペテロを通してよみがえらされたタビタを見ることになるのです。私はここに教会が心をつにして主に願うことの大切さを見ます。そのようにして、二人または三人が、主の名によって集まるところに主もまた臨んで下さり、ご自身の栄光を現わして下さるのです。

もちろん、願っても聞き届けられない祈りがあります。何度、切に祈っても、祈った通りに応えられない祈りがあります。そのような時、私たちはどうしても落胆してしまうことでしょうか。御心がわからないと思ってしまうことでしょうか。期待して祈っても聞かれないなら、最初からあまり期待しない方が良く、願わない方が良く考えるかもしれません。でも、そのような中でこそ、主は私たちと出会って下さる。そして、私たちは主がともにおられることの幸いを知るのです。

いやされたアイネヤは、「なぜもっと早くにいやしてくれなかったのか！私は8年を無駄にした」とペテロを責めたと思いますか？死よりよみがえったタビタは、「なぜ私が病気にならないように守って下さらなかったのか」と主を責めたのでしょうか？また彼女を慕う者たちは、よみがえったタビタを見て、「なぜ彼女が死ぬ前に、前もって助けて下さらなかったのか」とペテロを責めたと思いますか？みなこのことを通して主の御名をあげ、主を喜んだのではないのでしょうか？彼らのうちに主への恐れと大きな喜びを見て、人々は主に立ち返り、主を信じるようになったと思うのです。

病や死は、私たちに暗い影を落とします。病を通して、私たちはいつでも自分の計画が中断されること、また自分の意思とは関係なく、その生き方が変えられる経験をします。また死を通して、私たちは自分の力、がんばりではどうにもならない世界があることを確かに知るのであります。でも、暗やみが増せば増すほど、そこにある光の存在がいよいよ輝きを増します。そして、その光こそ主イエス・キリスト、私たちの主、救い主です。

主は、私たちが病の中を通る時も、肉体の死を通る時も、共にいて私たちを支えて下さいます。私たちが最後まで主を信頼し続けることで、この世を超えた天の御国へと私たちを招き入れて下さるためです。そのために主は、神のあり方を捨てて、人となり、この世に来て下さいました。私たちの病と死の原因である罪の問題を解決するために、主は十字架の死と復活の力をもって罪と死に勝利して下さいました。そして、今日もこの救いをもって、いかなる境遇の中にある人にも、希望を与えて下さっています。

ですから、今日私たちが覚えないこと、それは主があわれみ深いお方であるということ、そして、主には人知の理解を超えたすばらしい救いのご計画があるということです。私たちには主の御心とその救いのご計画のすべてを知ることはできません。ですから、「なぜ今？」「なぜ私が？」と問いたくなる時も必ずあるでしょう。それでも、主は、私たちからいつでも信頼を受けるに値するお方です。いのちを捨てることまでして私たちを愛して下さいのお方だからです。

私たち自身は、どこまでも疑いやすい者です。その信仰は「からし種」ほどもありません。それゆえに、私たちは自分の信仰は誇れないのです。でも、主イエスを、主の信仰を誇ることはできます。なぜなら、信仰の薄い私たちをあきらめず、見捨てず、今日もしっかりと捉えて下さっているのは、主イエスだからです。そのようにして主に愛されているので、私たちは今日も父なる神様の御顔を仰ぎ求めることができます。死よりよみがえられた主が天に昇り、父なる神様の右の座で私たち一人一人のためにとりなしをして下さっているからです。主がこのようなお方であって下さるので、それが心であれ、肉体であれ、主には私たちをいやすことができになるのです。そして、信じる者は、主の栄光を見ます。